

毎月11日掲載

# 防災・減災のページ

## 第75回 神奈川新聞と共催 @神奈川・平塚

### むすび塾

グループホームでは、88歳、100歳の入居者3人がスタッフに介助され車いすなどで避難。自力で歩けない100歳の女性をマットに寝かせて2階から降ろすなどして施設を出発し、約200m先の高台に向かった。避難には6分43秒かかった。

管理者の川島航さん(29)は

「建物を出るまでの時間をいかに短くできるかが課題だ」と語った。施設は相模湾から約1.5km北、花水川からは約100m東にある。宮城県亘理町の菊池敏夫さん(68)は「震災時は川から来る津波の方が早い所もあった」と注意を促した。

花水川保育園近くの消防士兼子直人さん(43)と妻静佳さん(41)は「車いすの高齢者が避難に不安を訴えたり、ベビーカーが未舗装の所を通るのに時間がかかる場面もみられ、東洋英和女学院大の桜井愛子准教授は「リアルな状況で課題を確かめられた。課題を踏まえ、迅速に避難できるよう対策を進めてほしい」と助言した。

避難訓練は相模湾に面した平塚市のなでしこ地区であり、撫子原自治会の住民ら約30人が参加。高齢者が暮らすグループホームなど3地点からそれぞれ最寄りの高台に逃げる手順を確認した。

高台や高台までの避難経路は市が昨年11月作成した「逃げ地図」で提示。今回の訓練は逃げ地図を初めて実地で確かめる機会となり、各避難先まで6分以内にとり着けるかどうかを確認した。

参加したのは、グループホーム「へいあんなでしこ」関係者のほか、建て替えのため海沿いに一時移転した花水川保育園近くに住む家族、自宅でネイルサロンを営む家族の計3組。

# 6分で津波 避難迅速に



職員に引率され、避難先の高台に向かうグループホームの高齢者ら



グループホームを出る前、自力で歩けない高齢者はマットに乗せられて階段を下りた



自宅を出発する兼子さん。背後の松林の裏にはすぐ海が迫る

### 相模トラフ想定し訓練

河北新報社は4日、神奈川新聞社(横浜市)と共催し、通算75回目の防災・減災ワークショップ「むすび塾」を神奈川県平塚市で開いた。関東大震災の震源ともなった相模トラフで起きる大地震を想定し、津波避難訓練を実施。「地震から6分で最大9・6級の津波が襲来する」とする神奈川県の予測を踏まえ、迅速な避難に向けた課題を東日本大震災の津波経験者らと考えた。

### ■むすび塾に参加して



【参加して】日常の延長のように避難訓練してきた一方、語り部の皆さんから「災害時は渋滞やブロック塀の倒壊といった事態も起きる」と指摘された。スムーズに歩けない状況や川から来る津波も念頭に、地域にとつて安全な場所は「このかたを住民と議論していきたい」撫子原自治会長・白井照司さん(69)



【災害への不安】グループホームには身動きのできない人や認知症の人もある。訓練に参加したのは3人だったが、ホームの入居者は18人。スタッフの少ない夜間に災害が起きることも考えられ、人員態勢や安全な避難場所などを早急に考えなければと思ったグループホーム「へいあんなでしこ」管理者川島航さん(29)



【災害への不安】7歳、5歳、1歳の子どもと夫の家族5人で訓練に参加した。歩き慣れた道でも歩道が狭く、「家が倒れたら通れなくなる」と不安に感じた。揺れへの対策も重要。家具の固定などを急ぎたい。来店客と防災を語り合い、津波が来た時に誘導できるように備える「ネイルサロン経営」若狭梓さん(35)



【参加して】家族で訓練に取り組めたのは良かった。地震が起きるとマンションが飛び出すこともあると聞き、想像力を働かせて備える必要があると感じた。津波の動画を見て危機意識を高め、1分1秒でも早く避難できるように最小単位の家庭から備えたい。平塚市消防本部救急隊・兼子直人さん(43)

### 神奈川・平塚

## 浸水深5mのエリアも 花水川沿い地区の半分冠水

平塚市は神奈川県のほぼ中央に位置し、人口約25万。相模湾に面し、海岸線が東西に約4.8km続く。市東部を相模川、市西部を花水川が流れる。

なでしこ地区は花水川河口の東部に広がる住宅街で約3000世帯、7500人が暮らす。

神奈川県が2015年3月に発表した津波の浸水想定によると、浸水深が5m近くになるエリアがあるほか、花水川沿いは内陸



約1kmのJR東海道線まで津波が入り込み、地区の半分近くが冠水する。



【災害に備えて】校長の判断で児童が全員助かった巨理町の小学校の話も聞き、自分の判断が園児の生死を分けることにつながると思いがたつた。子どもたちの命を守るため迅速避難訓練などをして職員と対策を考え、自治会なども協力して取り組みを進めたい。花水川保育園園長・鈴木裕理子さん(58)



【参加して】普段、友人との会話で防災を話題にするとはないが、訓練に同行して車いす避難の大変さなどを実感した。日頃の備えの大切さが分り、有意義だった。災害時に力のある若者の役割は大きい。今回の経験を同世代に伝え、防災意識を高めていきたい。東海大1年・片桐航さん(19)



【災害に備えて】試みとして作った「逃げ地図」が評価され、ありがたい。改善を重ね普及に努めたい。市は自助や共助に加え、隣近所で助け合う「近助」の大切さを訴えてきた。逃げ地図も今後、住民が地域を歩いてパシジョンアップさせ、迅速な避難に役立ててほしい。平塚市災害対策課長・脇孝行さん(52)

## 「地図」活用へ住民努力を

平塚市は「逃げ地図」をはじめ、行政の防災の取り組みが進んでいる。住民は行政が提供しているツールに手間は加えず、より有用にしていける努力が必要だ。

重要なのは、全ての住民に「6分で9・6級の津波が来る」という可能性があることを知り、地域全体の意識向上につなげたい。備えの意識を浸透させるには、祭りなどイベントを活用して啓発するのも有効だ。



東洋英和女学院大准教授(防災教育)

桜井 愛子さん(47)

### ■専門家から

訓練に参加した親子が「ここまで来れば大丈夫なの？」、「いや、予想を超えて津波が来るかもしれない」と言ったりして印象的だった。

なでしこ地区には児童数約1000人の学校があり、防災教育に力を入れている。子どもたちが授業の内容を家で話す時、保護者の皆さんはぜひ真剣に聞いてほしい。意識の浸透に努めてほしい。

## 親子で話し合いを重ねて



宮城教育大大学院准教授(防災教育・地理学)

小田 隆史さん(39)